

# 魅せられて、 私の「歌」道標

「歌との出会い」を求めて



## 奥村晃作

### 谷間からの脱出

わたしの親父は農家の三男坊であった。小学校を終えると町の質屋に丁稚奉公人として出された。頭がよく、真面目で、勤勉な人であったから、この道一筋に励んで、商人としての成功を収め、一代で財をなした。具体的に言うと人口二十万の谷間の市町村で高額所得者（所得番付第一位）となった。だが、その財はわたしら子と孫とが消尽し、一代で尽きようとしている。そんなものである。

親父が死んだとき詠んだ挽歌の中から何首か引いてみる。

商人父の期待とことごとくにたがふ生きざら

ま買いて来ぬ

八十を越えると体がホンニチア弱ルと言  
ひし父を記憶す

### 晃作ヨ頼ムニ頼ムニ頼マレシ父の願ヒヲ 我方容レザリキ

小学生の頃、本が読みたくてしかたがなく、「本を買って」と頼んだら（母が親父に頼めと言うから）「バカヤロウ、本なんか読んでなにになる」と一喝された。貧しくて本など読むことの出来ない環境に育った親父は、悲しいかな本当にそう信じていたのである。ついでに言うなら、わたしの育った家庭の雰囲気は、はっきりと芸術方面の人、つまり画家や詩人・小説家などを蔑（なげ）していた。

わたしは幼い頃からいわゆる優等生であった。大して勉強しないのによく出来た。

ものごころつく頃からわたしは、将来自分はこの谷間を出なければならぬ人間だ、と思っていた。一番手っ取り早い方法は東大に入るのだと思うようにもなった。そこで一途に勉強して目的を果たしたが、受験勉強のやりすぎで燃え尽きてしまい、大学に入ってから自らを癒すのに長い年月を要した。

## 消去法の進路選択

わたしは何のために生まれてきたのか、どういう使命を帯びてこの世に遣わされた人間であるのか、何をすべきなのか、何がしたいのか、その点に關してはいまだに皆目見当がつかないのである。

ものごころついたその日から、将来何になろう、何になりたいか、という点に關しては何も思い当らなかつた。次善の策として消去法で道を選び取ってきた。

物理が嫌だから自分は文系の人間と思ひ、文系を選んだ。文系は法経と文学に大別されるが、法経と思ひ（これには育ちの環境・両親の考え方が影響を及ぼしたのかもしれない）東大を受けるときは文科一類を選んだ。本郷に進むとき法学部、経済学部どちらでも選べたが、自分は経済学部の方がまだしも向いていると思ひ、経済学部に進んだ。卒業してからは商社に入った。大学を出ると人は生活のために働かなければならず、そのときわたしはまた、例のごとく、やりたいこと、就きたい職業がなく、これまた消去法で商社に決めたのであつた。

三井物産本店運輸部輸入第一課で木材輸入を担当すること一年余り、もうどうにも勤められなくなつて会社を辞めた。きりぎりの選択であり、自分でも苦しみ抜いた挙げ句のはての決断であつた、というよりは完全に潰れた（商社に入ったのは親父に対しての義理立てであつたといまにして思う）。すでに結婚して妻がいたこともあつて、生活のためには引き続き、勤めなければならぬ。これも消去法で学校の先生になるしかない、ということ、東大に学士入学をし、就職の単位を取得した。縁あつて都心の私立の中学・高等学校

に勤め口を得、以来今日にまで至っている。

## 宮柧二先生との出会い

燃えつき症候群の若者として真つ暗なトンネルの底を一人とほとほと歩いてきた学生時代の最後の頃、ある女性と出会い、彼女に導いて貰つて、歌を始めた。彼女が「ヒムロ」に所属していたから「ヒムロ」に歌を出した。一度だけ、アララギの面会日に発行所を訪れ、五味保義氏に歌を見て貰つた。会員でもないのに五味さんはわたしの一首を「アララギ」に掲載してくれた（昭和三十五年十一月号）。

当時アララギはすでに活力に乏しかったから、若いわたしは見向きもせず、他に物色した。雑誌の広告で知り、コスモスに入会した。宮柧二先生を訪問した。何やら鬱積するものを内に抱えていたわたしは堰を切つた水が勢よく溢れ流れ出るように一人で喋つた。

先生は苦造の話に相槌を打ちながらじつと聞き入ってくれた。自分を全面的に受入れてくれる一人の大きな人との出会いであつた。でも、それが歌との出会いであつたのかどうかはいまだに定かではない。というのは、次の二点に徴しても、そう言わざるを得ぬ。①わたしはいまだかつてこれはいち一首の歌に出会つた自覚がない。②他人の歌集を読んで表現上での参考としたことは一回もなく、他人の歌や歌集を読んで自分の歌が出来たことは一度もない。

わたしは歌人というよりはアジテーターであつたようだ。コスモス入会は昭和三十六年五月、その年のうちに在京の学生などの若者を集めて、勉強会を結成した。グループ・ケイオスと呼んだ。その後もコスモス本体の活動と併せて、絶えずグループ活動を続けてきた。「群青」「歌学」「江戸時代和歌」「棧橋」等と。

## 宮先生と私

さて、宮先生と出会った頃は、先生も会社を辞めて歌一本の生活を始めた時、つまり先生は先生で第二の青春を迎えていたので、われら学生連中とよく飲んだ。

ある冬の寒い日。高田馬場の飲み屋でいつものように飲み、空にした銚子がズラリ三十本以上壁ぎわに並んだ光景は今でもはっきりと覚えているが、あとの記憶は定かでない。無事下宿にはたどり着いていて（終電はとうに終わっていた）目覚めると友の日は一緒にあった。

昼までに次の事実が判明した。①Tは明け方まで路上に寝ていて、危うく「こえ死（じ）しそうになった。②Kは宮先生の鞆（たもと）を抱きしめたまま電話ボックスの中に倒れていた。③宮先生はKの眼鏡を手に握りしめ、自室のベッドに寝込んでおられた。

十時頃、宮夫人よりわたしの下宿に電話が掛かり、原稿を入れた大切な鞆が見当たらないのだが、という一騒動もあったが、ともかく事なきをえた。

コスモスの編集会の日には頼まれたわけでもないのに、わたしはかつてに出かけて行き、仕事の手伝いをした。徹夜して仕事に励む先生の横でひと夜を明したこともある。

その時のことを先生は歌に詠まれたので、先生の第七歌集『藤棚の下の小室』から一首を引く。

### 歌誌編輯

奥村晃作君と徹夜して、歌誌「コスモス」の編輯をなす

## 冷えふかむ部屋に言絶（こと）え励みあひ若き君の 目血（め）ぼしりてくる

「歌に出会う日」を夢見て

宮先生が亡くなられてからはや十年の歳月が流れた。

わたしも作歌歴四十年、コスモスでは選者を勤め、編集委員を勤めている。歌を始めてから四十年間いつ時も休むことなく歌にかかわってきた。歌集を六冊出し、評論集を五冊出した。にもかかわらず、わたしは歌と出会ったと言えるであろうか。

少年の日と同じく、あいつも変わらず、本当にやりたいことが何であるのか分らない。何のために生まれてきて、どういう使命を帯びていまなお生かされているのかよく分らない。だけれど、最近になつてうすうす実感できることがある。「短歌に関わつての文章は書けそうだ」ということ。そしていつの日か「自分もようやく歌を詠めそうだ、ああオレも歌と出会ったんだ」という日を迎えてみたい。

それとあわせてわたしは自分の生活態度を少しづつ変更して行かねばならぬことに気付いている。東大受験の受験勉強に取り組んだその日からわたしは今日まで一貫して受験生のごとき生き方を貫いてきた。一日中勤め、励み、本を読み、物を書き、その一方で他人と話をしたり、付き合ったりする時間を惜しむような、忙しく追いまくられる日々を送ってきた。超多忙人間。それもたんに自分で自分を忙しくしている人間。忙は心を亡くすことだが、まさに心を亡くす日々を送ってきた。そんな人間だからいつまでもたっても歌と出会えないのかもしれない。残り少ない生涯をこのまま終わってしま



コスモスの大会にて。  
筆者（左から三人目）の左は宮柁二、右は島田修二。

奥村晃作

次々に走り過ぎ行く自動車の運転する人みな  
前を向く  
大根が身をのり出してうまさうな肩から胸ま  
でを土の上に晒す  
満開の桜の花を保たせんと東京は雙の底冷え  
つつく  
少年が引き連れて冬の夜の空の星を見に行く  
家族四人で  
さんざんに踏まれて平たき吸殻が路上に在り  
てわれも踏みたり

奥村晃作  
(おくむら・こうさく)

昭和11年長野県飯田市生まれ。  
東京大学経済学部卒業。高校教諭。  
宮柁二に師事。「コスモス」選者および編集委員。  
「棧橋」発行人。現代歌人協会理事。歌集は『三齡幼虫』など六冊、  
評論集は『抒情とただごと』など五冊を刊行。

か、という思いを強めている。

振り返って、孤独の、一人に生きるわたしの心の中の思いを  
歌い上げた歌を引いてみたいと思う。「孤絶の境涯詠」とでも言  
おうか。

先生とお会いしたころの若い時代の歌から引く。

抑へても抑へても激つ火の海を裡に抱へて

生活者われ

突風にさらはれしわがたましひがもどりし

宵は口ずさみをり

わが子さへ蟹の甲羅にひそむごととほき想

ひそ人込みを行く

次に中年以降の歌を検してみたが、さすがに「孤絶の境涯詠」  
は激減している。生活態度・生活の危機に変わりはなかったが、  
もう詠まなくなったのであろう。心亡き「多忙」生活に変わり  
はなく、その類の歌から二首だけ引いておく。

一日中時間を持つになほ忙しわれはどこか  
がまちがつてゐる

然ういへば今年はずだう食はなんだくだも  
のを食ふひまはなかつた

もうこんなに忙しい日々の生活からは足を洗い、のんびりと  
心豊かに生きたいものだ、とは念じつつも、結局はいままでの  
歩みを先へと続けるしかないであろう。「歌との出会いの日」を  
夢見つつ。